



山陽小野田市

ふるさと文化遺産

# 山陽小野田市ふるさと文化遺産

# 山陽道



御国廻御行程記（山口県文書館蔵）  
現在の本町・広瀬付近



石丸



旧厚狭市の街並み







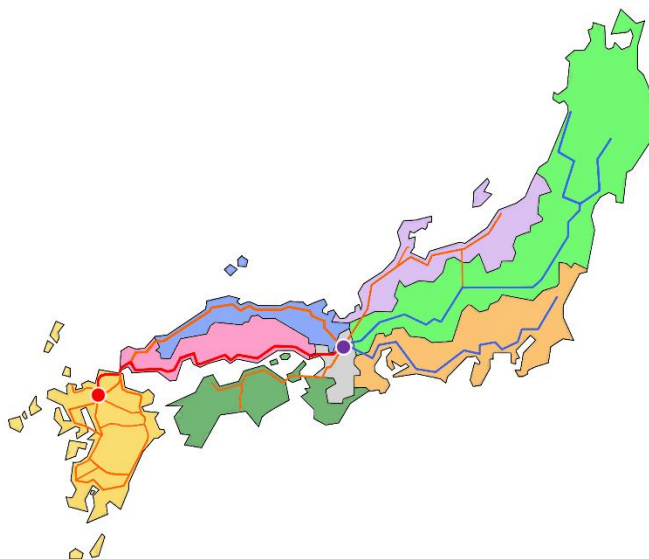
西見峠

# 山陽道

山陽道は、古来より様々な人・物・情報が行き交う大変重要な道でした。時代が変わる度にその姿を変え、今も当時の遺産が沿道に数多く残っています。古代から現代までの山陽道の歴史とともに、人々の生活にどのように関わってきたのかをみていきましょう。

## 古代の七道

- |   |     |   |     |
|---|-----|---|-----|
|    | 北陸道 |    | 都   |
|    | 東山道 |    | 大宰府 |
|    | 東海道 |    | 畿内  |
|    | 山陽道 |    | 大路  |
|    | 山陰道 |  | 中路  |
|  | 南海道 |  | 小路  |
|  | 西海道 |   |     |



## 序章 山陽道の歴史

### 古代

8世紀頃まで (奈良時代) 駅家・伝馬制 (駅制) を基本とする交通体系が整備されました。  
 11世紀頃から (平安時代) 武家政権が成立する中世になると、古代の駅制に代わって、駅路が整備されました。南北朝の内乱等で武士の往来が盛んとなり、

### 中世

新たに宿駅・関が成立しました。  
 16世紀後半 (安土桃山時代) 豊臣秀吉による島津攻めと文禄・慶長の役を契機に、山陽道が本格的に整備され、これらの遠征でいまだかつてない大軍が往来します。また道路の拡幅、橋梁の修理、一里塚の設置も行われました。

### 近世

18世紀頃まで (江戸時代) 西国大名の参勤交代に利用されました。

### 現代

国道2号線が整備され、その後路線の一部が変更され、現在に至っています。

さんようどう、さんようおのだしない、あき、であい、はぶちくとお  
 山陽道は、山陽小野田市内の**厚狭・出合・埴生地区**を通っていました。

えどじだい、さんきんこうたい、みち、りよう、とのさまみち、よ、いま  
 江戸時代には参勤交代の道として利用されたことから「**殿様道**」とも呼ばれ、今もなお

しゆくばまち、おもかげ、みちしるべ、のこ  
 宿場町の面影や道標がところどころに残っています。

じだいごとの、かくちく、れきし、しょうかい  
 時代ごとの各地区の歴史を紹介します。

	厚狭地区	出合地区	埴生地区
古代	あきごう、いちぶ 厚狭郷の一部 さんようどう、うまやはいち 山陽道に <b>駅家配置</b> あきごう、ぐうげ、はいち 厚狭郷に郡家が配置 いんようれんらくろ、きよてん 「 <b>陰陽連絡路</b> 」の <b>拠点</b>	あきごう、いちぶ 厚狭郷の一部	まつやごう、いちぶ 松屋郷の一部 さんようどう、うまやはいち 山陽道に <b>駅家配置</b>
中世	しもがもじんじやりよう、あきのしょう 下賀茂神社領「 <b>厚狭庄</b> 」・ かものしょう、すいさつ 「 <b>鴨庄</b> 」と推察 さんようどう、しゆく、はいち 山陽道に <b>宿が配置</b>	さんようどう、しゆく 山陽道の <b>宿があったと</b> すいさつ 推察	いわしみずはちまんぐうりよう、はぶのしょう 石清水八幡宮領「 <b>埴生庄</b> 」 あかまがせきほうめん、かいじょうこうつう 赤間関方面への海上交通の きよてん、おお、たびびと、おうらい 拠点で <b>多くの旅人が往来</b>
近世	すえますむら、かものしょうむら、こおりむら 末益村、鴨庄村、郡村 あさいち、しりょう 厚狭市と史料に記述 さんようどう、しゆくばまち、はんじゆく 山陽道の <b>宿場町(半宿)として</b> はってん 発展	やまのいむら、やまかわむら 山野井村、山川村 いちぶ、ちようふはん、りようゆうち 一部が長府藩の領有地 いちぶ、くまがいしりようゆうち 一部が熊谷氏領有地 あきじゆく、すけごう、むら 厚狭宿の <b>助郷の村</b>	はぶみち、わきかいどう 埴生道が脇街道となる はぶうら、はってん 「 <b>埴生浦</b> 」として発展 いちぶ、ちようふはん、りようゆうち 一部が長府藩の領有地
近代	こうせいむら、めいじ、ねん、あさちよう 厚西村（明治22年）→厚狭町 たいしゅう、ねん （大正7年） さんようてつどう、あさえき、せっち 山陽鉄道「 <b>厚狭駅</b> 」設置	であいむら、めいじ、ねん 出合村（明治22年）→ あさちよう、しょうわ、ねん 厚狭町（昭和4年）	いくたむら、めいじ、ねん 生田村（明治22年） かいじょうこうつう、きよてん、ぎよそん 海上交通の <b>拠点、漁村とし</b> はってん て発展 さんようてつどう、はぶえき、せっち 山陽鉄道「 <b>埴生駅</b> 」設置
現代	あさちよう、さんようちよう、しょうわ、ねん 厚狭町→山陽町（昭和31年） さんようおのだし、へいせい、ねん →山陽小野田市（平成17年） ばいばす、かいつう バイパス <b>開通</b> しんかんせん、あさえき、かいぎょう 新幹線「 <b>厚狭駅</b> 」 <b>開業</b>	かいつう バイパス <b>開通</b> こうぎょうだんち、けいせい 工業団地の <b>形成</b>	いくたむら、はぶちよう、しょうわ 生田村→埴生町（昭和23 ねん、さんようちよう、さんよう 年）→山陽町→山陽 おのだし、ぎよじょう、はんじょう 小野田市 漁業が <b>繁盛</b> かいつう バイパス <b>開通</b> こうそくどうろ、せっち 高速道路の <b>IC設置</b>



きゆうこうさつばあとしゆうへん  
 旧高札場跡周辺



やまのいはちまんぐう  
 山野井八幡宮



いとねじんじやみちしるべ  
 糸根神社道標

[右下関]

# 第1章 古代の山陽道

## 古代の山陽道と陰陽連絡路（厚狭から山陰道へ続く道）



▲ 図1 『山口県史 通史編 原始・古代』761頁  
「周防・長門の駅家の比定地」を基に作成

### 1. 官道の整備

古代では国を治めるための法律（律令）ができ、これによって都から全国へ支配を広げていく仕組みが作られました。中央と地方を結ぶ道を作り、各地の人々は、さまざまな税や兵役などを負担しました。また外国の大切なお客様を迎える表玄関であった大宰府と都を結ぶ道として、とても重要でした。図1のように現在の山口県内には、23の駅家が設置されました。

### 2. 駅伝制

道路に沿って人・馬を常備した駅（駅家）を置き、馬を乗り継いで往来していました。

日本古代の駅伝制は7世紀にできました。

#### 駅制（中央と地方の交通手段）

- 急を要する出張や、公文書の配達に利用
- 原則として30里（約16km）ごとに駅（駅家）を設置し、馬・乗具を常備
- 大路（山陽道）各馬20疋
- 中路（東海・東山道）各馬10疋
- 小路（その他4道）各馬5疋

#### 伝馬制（各国の国と郡を連絡）

- 国司の赴任や巡視に利用
- 各郡が5疋の伝馬を常備



律令国家と同時に衰退し、どちらも、機能しなくなりました。

### 3. 山陽道の駅家の比定地 さんようどう うまや ひていち \*比定地とは比較して推定する土地 ひていち ひかく すいてい とち

長門国の駅家で古代当時から今も使われ続けている地名は、**厚狭**と**埴生**だけです。  
 また、郷（現在の市や町）名をみても厚狭郷しかありません。周防国では郷内に置かれた駅は、その郷名を駅名にしましたが、長門国では郷内で駅が置かれた場所の地名を採ったのでしょう。厚狭駅から分かっている陰陽連絡路も、駅名を伝える現在の地名が少ないため、駅家の比定が難しいです。

長門国の山陽道駅の比定地 ながとのくに さんようどうえき ひていち

『県史通史編 原始・古代』を基に作成

駅名	比定地	郷名
阿潭駅	宇部市吉見カ	—
<b>厚狭駅</b>	<b>山陽小野田市厚狭</b>	<b>厚狭郡厚狭郷</b>
<b>埴生駅</b>	<b>山陽小野田市埴生</b>	<b>厚狭郡松屋郷</b>
宅賀駅	下関市小月	—
臨門駅	下関市前田カ長府外浦町カ	—

#### コラム①



#### 「厚狭」・「出合」の地名のはなし あさ であい ちめい

「厚狭」は、今では「あさ」と読んでいます。しかし、古代（およそ1300年から800年前）では別の読みをしていたようです。およそ1000年前の百科事典である『和名類聚抄』（わみょうるいじゅうしょう）には、「厚狭」の読み方として「阿豆佐」や「安都佐」と書かれていることから、「あづさ」・「あつさ」と読んでいたことがわかります。

その「厚狭」の隣に「出合」という地区があり、公民館や小学校にその名前が使われています。この「出合」は、山川村、山野井村が明治22年（1889）に合併したことが始まりです。2つの村に通ずる「山」を組み合わせて「出」とし、それが合わさったということで、「出合村」と決定したそうです。



## 第2章 中世の山陽道

### 1. 地形を利用し、変わっていく山陽道

周防国・長門国（防長両国）は全体的に海岸近くに広い平野が少なく、安芸国（広島県西部）以東の山陽道と比べて、内陸の山間部を通る区間が比較的長いことが特徴です。山間部といっても、ほとんどは起伏がなだらかでしたが、峠道もありました。

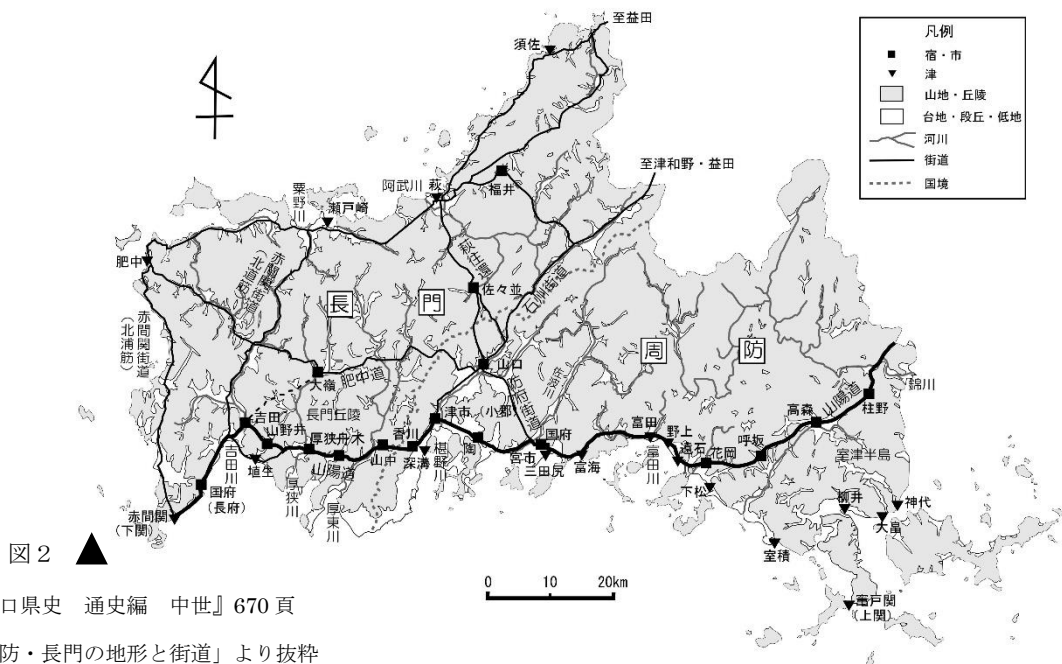


図2 『山口県史 通史編 中世』670頁  
「周防・長門の地形と街道」より抜粋

防長2ヶ国における中世の宿・市は、平野部が多い瀬戸内海側の山陽道沿いに集中して造られています。長門国は海岸沿いの平野が狭く、山陽道の大部分が内陸を通過していたため、河川（厚狭川、厚東川、吉田川）沿いの平野（舟木・厚狭・吉田）に宿・市が造られています。

### 2. 中世から近世へ

防長両国を支配した毛利氏は、領国内の山陽道に宿駅整備を行い、さらに豊臣秀吉は九州への島津攻めと朝鮮出兵（文禄・慶長の役）の時に、山陽道の整備を命じました。それらの結果、山陽道の流通はさらに活発になり、山陽道沿いの市町はより発展することになりました。現在の山陽小野田市（旧山陽町）にも多くの有名人が通り、宿泊した記録が残っています。

（第4章で紹介）

## 第3章 近世の山陽道

### 1. 絵図でみる山陽道

享保13年(1728)の「地下上申絵図」や宝暦年中(1751-63)の「御国廻御行程記」は、その頃の山陽道や、それから分かれる枝道の様子を伝えています。

**地下上申絵図**▶ 萩藩の領内全550余りの村ごとの絵図で、当時の周防国と長門国の両国にわたっています。このように広域に及ぶ村ごとの絵図は全国的に例がありません。この作成方法は、各村の庄屋から境界や家・街道・河川などを書いたもの(地下図)を提出させ、それを藩の絵図方が清書(清図)する形で行われました。



◀ 図3 地下上申絵図(山口県文書館蔵)  
現在の山陽小野田市山野井付近



◀ 図4 地下上申絵図(山口県文書館蔵)  
現在の山陽小野田市津布田付近



◀ 図5 地下上申絵図(山口県文書館蔵)  
現在の山陽小野田市埴生付近

おくにまわりおんこうていき

# 御国廻御行程記

はぎはん

はんしゅもうりむねひろ

おくにまわ

とのさま げんちしさつ

みちすじ

萩藩の6代藩主毛利宗広の御国廻り（殿様の現地視察）の道筋を

描いた全7帖の街道絵図です。寛保2年(1742)、雲谷派の絵師で萩藩絵図方雇となった有馬喜惣太らによって、作製されました。その形態は御国廻りに持っていき、広げて見るのに便利  
なように折本仕立てとなっています。



▲ 図6

御国廻御行程記

(山口県文書館蔵)



▲ 図7

一般社団法人 山口県観光連盟発行  
「古地図を片手にまちを歩こう。」  
宿場町厚狭 マップより抜粋

## コラム②



## むかしの道路標識!?! 一里塚 (一里山) とは

全国的にこれが制度化したのは、徳川家康が秀忠に命じて、慶長9年(1604)に江戸日本橋を起点とした三道(東海・東山・北陸)の一里(36丁-4km)ごとに道標を造らせたことに始まっています。道標は盛り土の塚で、一般にはその上に榎を植えて目印としたことから一里山ともいわれました。

### ★山陽小野田市(旧山陽町)のどこに一里塚はあった?

「御国廻御行程記」の山陽道沿いに3か所、伊佐街道沿いに3か所の一里塚を確認できますが、その遺跡はいずれも残っていません。

山陽道沿い: 村境の西見峠、山野井の七日町、福田の蓮台寺坂上り口の3カ所

伊佐街道沿い: 松ヶ瀬の乗清、柳瀬、郡の3カ所

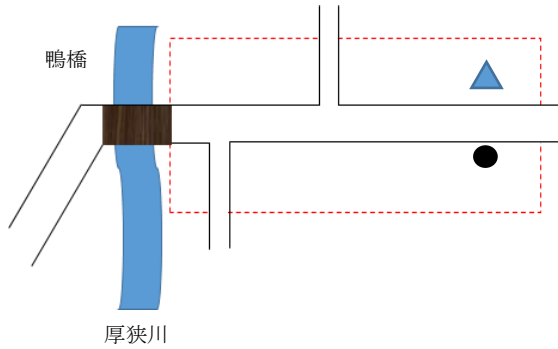


## 2. 宿場市町の形態

宿場市町はいずれも山陽道に面して間口が狭く、奥行きが長い縦長の屋敷が並ぶ集落です。

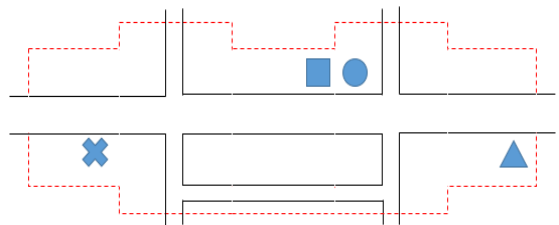
### 単線型直線状 (厚狭)

街路が1本の単線型



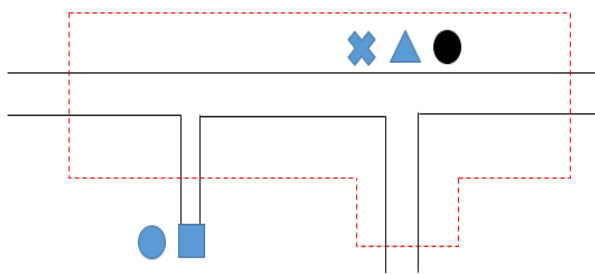
### 複線型 (船木)

裏通りのある複線型



### 三叉型 (吉田)

T字状に交叉する三叉型



- 凡例：
- 勘場：萩藩の出先機関
  - 御茶屋：お殿様の休憩所
  - ▲ 高札場：掲示板
  - ✕ 天下物送り番所
  - 市エビス

▲ 図8 『歴史の道調査報告書 山陽道』52頁  
「宿場市町の形態」を基に作成

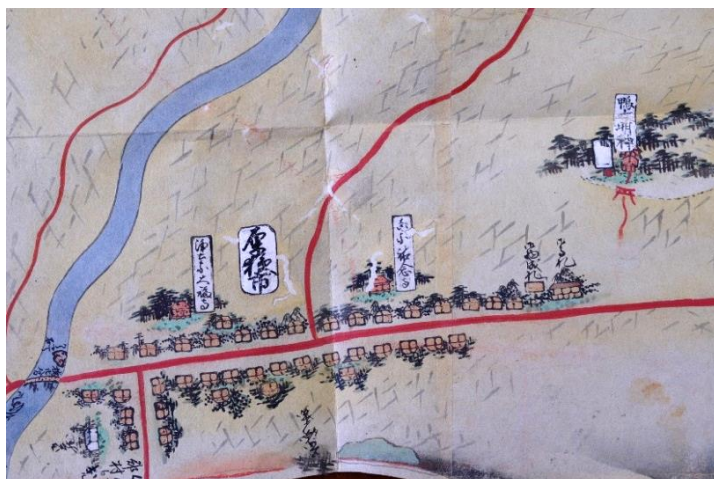
この時代の宿場には本宿と半宿があり、船木と吉田は本宿で、**厚狭は半宿**でした。本宿にはお殿様が泊まる本陣があり、半宿には旅人宿はありましたが、お殿様などは休憩か昼食をする程度で、厚狭では大福寺や祐念寺及び枝村家が休憩所に利用されたようです。

ず さんしょう  
(図9参照)

「当駅は吉田・船木の間で半宿ではあるが、本宿同様に人の往来が多く、そのうえ在方・沖目(海の方)とも手広く引き受け、山川海辺への便利がよい所柄であるから、商売を営むものが多いが、在・町のこと故商家の者もわずか宛は耕作に従事している」と当時の村の様子分かる『風土注進案』に書かれています。

### 3. 厚狭市

厚狭市に町並みがあって、商人が住み商業が営まれました。商人は山陽道の往還筋に店舗を連ねていましたが、ほとんど半農半商の生活でした。天保末年(1840頃)厚狭市の商家の種類は以下のように、厚狭市周辺の殿町、下津に散在していたのでしょう。



◀ 図9  
地下上申絵図(山口県文書館蔵)  
現在 山陽小野田市殿町付近

食料品関係：煮売屋(3)、豆腐屋(1)、糍屋(1)、魚屋(9)、

小米屋(1)、酒屋(2)、醤油屋(1)、飴屋(1)、菓子屋(1)

衣類関係：綿屋(11)、古手屋(2)、濃物屋(13)、紺屋(5)

家具関係：瀬戸物屋(2)、荒物屋(2)、鍋屋(1)

建材・照明関係：瓦屋(2)、油屋(4)、ろうそく屋(1)

その他：硯屋(2)、腰物屋(1)、宿屋(1)、肥屋(2)

▲ 『防長風土注進案』より

( )内は軒数。一番軒数が多い

**濃物屋**とは小間物に同じ。

べに おしろい くし かんざし  
紅・白粉・櫛・簪など婦人の化粧用のこまごました品物。

『近世防長古文書用語辞典』参照

現在の殿町は厚狭毛利氏の居館があったこと由来します。厚狭毛利氏が居館をかまえたこの場所は、北へ500メートル行くと山陽道に沿う厚狭市があり、また厚狭川の左岸にあり、やや下流にある下津は舟便にも恵まれており、居館の地としては格好の場所であったのではないのでしょうか。



◀ 図10  
厚狭毛利居館絵図(洞玄寺蔵)

#### 4. 枝道「埴生道」「津布田道」

七日町外れの道標、「左はぶ道」とある所で、山陽道と分かります。この「埴生道」が中世までの山陽道の古道でした。近世の山陽道は内陸に入り、福田から蓮台寺峠を越えて、吉田を経て小月に出ます。「津布田道」は下津まで伊佐街道の続きで、下津で川を渡った先の梶浦に出てから、大河・津布田を経て埴生に出ます。



至 山野井



「津布田道」大河

#### コラム③



#### かいり りくろ 海路から陸路へ

近世前期には、幕府上使・長崎奉行の移動や諸大名の参勤・帰国はほとんど海路であり、正徳・享保期（1710年代）以降、これらのうち陸路に替えた者が増加してくる事実があります。なぜ日数がかかり、たくさんの供の者を必要とし、費用もかかったであろう陸路に替えたのでしょうか。

- ①海路は天候による危険や、風まち・潮まちなど予定が立てにくい。
- ②地方の駅制の整備が進み、山陽道が利用しやすくなった。
- ③山陽道沿いの町が経済的に発展してきた。

これらが想定されますが、いずれにしても山陽道は瀬戸内の海路と平行して走っているため、海路と深い関係のある道です。

## 第4章 有名人の旅日記に山陽小野田市が登場！！

山陽道は昔から人馬の往来が盛んでした。山陽小野田市は山陽道上にあり、交通の要地であることから、歴史上の人物が山陽小野田市に立ち寄っています。中世以降著名な旅行記の中から紹介します。

### いまがわさだ よ りょうしゅん 今川貞世（了俊）

南北朝・室町前期の武将、歌人

14世紀後半、九州探題を拝命して京都を出発した今川貞世（了俊）は、山陽道をゆっくり下り、道中記『道行きぶり』に旧山陽町内の有様を述べています。

日中ばかりこの山をこえて、あさの郡というさにつきぬ。むかし板がきの城と申しける山ぎはに、寺の侍るに今夜はとどまりたり。この寺の本尊は信濃国善光寺の如来をたしかにうつし奉りけると申す。

「雨にきる我が身の代にかへななむころもおるてふあさのさと人」

これによると貞世は厚狭の「郡」に着いて、昔板垣の城といった山際の寺に泊まっています。下津は昔板垣の津ともいっており、板垣の城というのは長光寺山のこととされます。貞世はおそらく現在の洞玄寺に泊まったのでしょ。



洞玄寺にある石碑

文中にある『雨降りに着る蓑に、わが身にまとっている麻の衣を取り替えたいものだ。この麻の衣は厚狭の里人がよるお夜織ったものという』との意味かもしれません。厚狭の地名を詠みこんだ最古の歌と思われま。

#### コラム④



#### あさもうりけぼだいじ とうげんじ 厚狭毛利家菩提寺 洞玄寺

厚狭毛利家は厚狭郡末益村（現在山陽小野田市郡）に居館を構えていました。現在は、殿町に井戸と石垣の一部がわずかに残されています。菩提寺である洞玄寺の裏山には厚狭毛利家の墓所（写真下）があります。女子教育の先駆者、毛利勅子の墓もその中に並び、厚狭毛利家の栄枯盛衰がしのべられます。



## そうぎ 宗祇

むろまちじだい れんがし  
室町時代の連歌師

15世紀後半、歌枕（歌に詠まれた場所）を求め、日本各地を旅したことで知られ、かの松尾芭蕉の旅も連歌師宗祇の影響を受けていると伝えられています。

連歌とは南北朝時代から室町時代にかけて大成された、日本の伝統的な詩形の一つで、多人数による連作形式を取りつつも、厳密なルールを基にして全体的な構造を持ちます。

文明12年（1480）6月、西国大名の大内政弘の誘いを受けて周防国山口に来た宗祇が、9月6日山口を出発して九州に渡り、大宰府・博多等を経て10月12日山口に帰着するまでの紀行を書いた作品『筑紫道記』があります。宗祇が山陽道内を通った9月8日の文には



宗祇坐像（山口県立山口博物館蔵）

暁天に皆人わかれを惜み立ち出て、はるかに行きて、その里をとへは、今宿とかいひて、左に塔婆のなかばみゆる寺有、うち過ぎ入りもて行けば深山にいとど木深く、鳥の音も絶えたるわたりにて、船に乗れといふ者あり。あやし、天の岩船にやと思ふに、此の山の末の浦人、旅人を迎へて世の営みにする。海路の渡し守なるべし。やや移り来て、はぶといふ浦に至りぬ。

とあります。前夜を船木の吉祥院に泊まり、早朝出発し、旧山陽町内を通りました。船に乗れと浦人が勧誘に来ているとあるのは、埴生浦の人たちで、このころ渡船業を営んでいた者がいた様子がしのべれます。埴生浦は山陽道の宿駅があり、また長府・赤間関・豊前へ渡海もできる港でもありました。

## しまづいえひさ 島津家久

せんごくじだい あづちももやまじだい さつまのくに ぶしょう  
戦国時代から安土桃山時代の薩摩国の武将

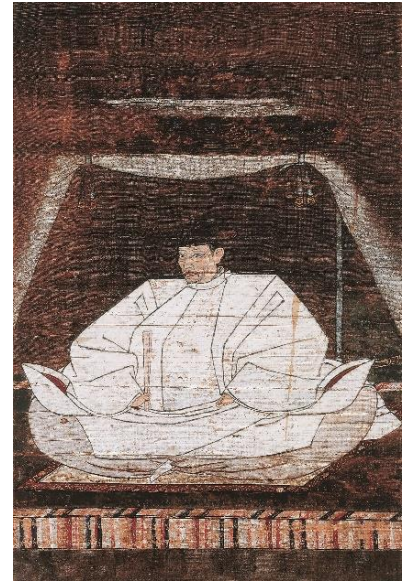
16世紀後半、天正3年（1575）の島津家久が伊勢参詣を行った際の道中日記「家久君御上京日記」に薩摩国から九州西部を上陸したのち、赤間関から陸路を長府、山野井に宿泊し、船木へと進み、安芸国に入っていると記されています。

とよとみひでよし  
**豊臣秀吉**

せんごくじだい せんごくじだい あづちももやまじだい ぶしょう さんえいけつ ひとり  
 戦国時代から安土桃山時代の武将、三英傑の一人

せいぎこうはん てんしょう とよとみひでよし  
 16世紀後半、天正15年（1587）3月24日、豊臣秀吉は  
 きゅうしゅうしゅつじん とじ はぶ しゅくじん  
 九州出陣の途次に埴生に宿陣しており、天正20年（1592）  
 なごやしゅつじん とじ ふたはぶ やど  
 4月18日、名護屋出陣の途次にも再び埴生に宿したことが  
 かくにん きゅうしゅうげこう ふし あさいち えだむらけ  
 確認できます。その九州下向の節に、厚狭市の枝村家の  
 ちんりゅうてい たよ しゅじん どうけ つく さけ しょうみ  
 枕流亭に立ち寄り、主人のすすめる同家の作り酒を賞美して  
 「霞海」と命名したとの説話が残されています。

えだむらけ あさがわ おおはし ひがし  
 枝村家は厚狭川の大橋の東たもとにあるが、そのころは  
 ふなわた おも どうけ なが かもしょう せんちょうがはら  
 舟渡しであったと思われ、同家から眺めた鴨庄から千町ヶ原に  
 かすみ かかっただよとした海をおもわすような風景で  
 あったのではないのでしょうか。



豊臣秀吉画像

(佐賀県立名護屋城歴史博物館蔵)



厚狭川東の枕流亭



▲ 図11 豊臣秀吉 名護屋出陣までの行程図

山陽道等の道は『山口県史通史編中世』671頁「周防・長門の地形と街道」、  
 『歴史の道報告書 山陽道』所収「近世防長主要路・馬継（慶安2年）」を基に作成。  
 秀吉の行程は、『大かうさまくんきのうち』（『山口県史史料編中世1』所収）を参照。  
 年月は、すべて天正20年（文禄元 1592年）4月。

- ※1史料には、「十七日、すおふのうちてんじん（天神）のこう（国府）御とまり」とある
- ※2『秀吉公高麗陣道中之間事』（『山口県史史料編中世1』所収）では15日の宿泊は「周防玖珂」と記される。

コラム⑤



とよとみひでよし しゅいんじょう  
豊臣秀吉 朱印状

せんごくだいみょう なか つね にんき じょうい とよとみひでよし せんごく よ さいしよ てんかとういつ  
戦国大名の中でも常に人気上位にくる豊臣秀吉。戦国の世で最初に天下統一を  
な と じんぶつ  
成し遂げた人物です。

えどじだい あさしゅうへん むらむら りょうゆう あさもうりけ いえ のこ あさ  
江戸時代、厚狭周辺の村々を領有していた厚狭毛利家。その家に残された『厚狭  
もうりけもんじょ』なか とよとみひでよし しゅいんじょう つうのこ  
毛利家文書』の中には、豊臣秀吉の朱印状が9通残されています。これらはすべて  
さいしよ ちょうせんしゅつべい ぶんろく えき  
最初の朝鮮出兵である文禄の役（文禄2年（1593）～3年（1594））のものです。

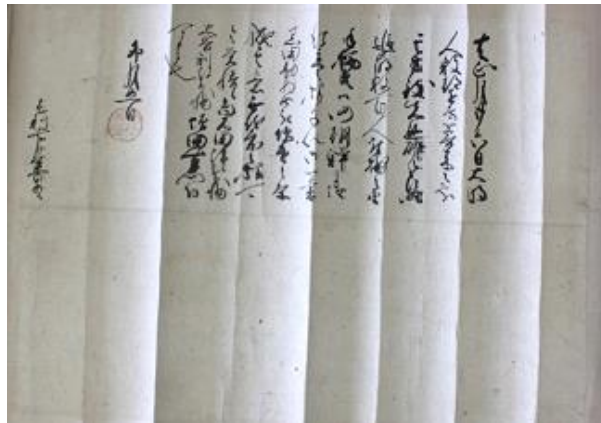
あさもうりけ そ だい だい せつ もうりもとやす もうりてるもとぐん ひとり  
厚狭毛利家の祖（第2代という説もある）毛利元康は、毛利輝元軍の一人として  
ちょうせん わた たたか おお こうせき  
朝鮮に渡って戦い、多くの功績をあげました。

ひでよし しゅいんじょう ぶんろく えき もとやす かつやく たい くらう ほ たた  
秀吉の朱印状は、文禄の役での元康の活躍に対して苦勞をねぎらい、褒め称えて  
ないよう しゅいんじょう なか いしだみつなり おおたによしつぐ くらだかん べ え ゆうめい  
いる内容です。これら朱印状の中には石田三成、大谷吉継、黒田官兵衛など有名な  
ぶしょう なまえ  
武将の名前もみられます。

ちょうせんしゅつべい さい さんようどう とお きろく のこ ひでよし あさ りょうゆう  
朝鮮出兵の際に山陽道を通った記録が残されている秀吉。のちに厚狭を領有する  
もとやす しゅいんじょう もとやす こうせい うんめい あん じ  
ことになる元康。これらの朱印状は、元康にとって後世の運命を暗示しているもの  
ではなかったでしょうか？



豊臣秀吉の朱印



豊臣秀吉朱印状（厚狭毛利家文書山陽小野田市立厚狭図書館寄託）

**【解説】**  
毛利元康の朝鮮での活躍に対して豊臣秀吉が送った朱印状。これによると漢城（現ソウル）での戦いで先鋒として活躍し、敵数百人を討ち取ったという。この朱印状には黒田官兵衛、石田三成、大谷吉継など有名な豊臣武将の名がみられる。

**【翻刻】**  
去正月廿六日、大明人数都近辺寄来之処、其方致先懸碎手、即時追崩数百人討捕之由手柄共候、仍朝鮮御仕置之様子、以御一書黒田勘解由被仰遣之条、成其意無越度之様可令覚悟候、尚石田治部少輔、大谷刑部少輔、増田右衛門尉可申候也、  
卯月五日 （朱印）  
毛利七郎兵衛尉とのへ

## 第5章 変わりゆく交通手段～車と鉄道～

江戸時代まで、人々の移動は主に徒歩でした。そのため山陽道は多くの人でにぎわい、宿場町などが発展しました。

しかし、明治になると人や物の移動手段は変わっていきます。人馬から人力車・大八車から自動車へと変化していき、それによって道路の改修が行われました。

そしてもう一つの変化が鉄道です。山陽道に並列するように、山陽鉄道が敷設されました。山口県内では明治31年(1898)には三田尻までが開通。同33年に三田尻～厚狭まで、以西は翌年赤間関(現下関駅)まで開通し、赤間関から神戸まで12時間40分程度で行けるようになりました。山陽小野田市内でも小野田駅(当時は停車場)、厚狭駅、埴生駅が開設されました。



明治45年頃の鴨橋



昭和20年頃の厚狭駅前



昭和20年頃の埴生駅前

昭和の半ば以降、車が移動手段の中心になります。山口県内でもバイパスや高速道路の整備が進められました。平成13年(2001)には、小野田と埴生にICが開設されました。そして鉄道も新幹線が開通し、平成11年(1999)に、厚狭駅に新幹線の駅が設置されました。

時代とともに人々の移動は時間も短くなり、便利なものになっていきました。

古きものは、その姿や人々の記憶からも消えていこうとしています。そのような中で、いま一度、「山陽道」に目を向けてみてはいかがでしょうか。



物見山から見下ろす厚狭の街並み



## 山陽小野田市へのアクセスマップ

山陽道を散策する時は、厚狭駅からが便利です。



### 厚狭駅までの所要時間

#### 🚗 自動車で

山陽自動車道 小野田 IC から 約 10 分

埴生 IC から 約 10 分

#### ✈️ 飛行機で

山口宇部空港から 車で約 40 分

#### 🚆 電車で

山陽新幹線「こだま」で厚狭駅下車

山陽本線 下関駅から新山口方面乗車 厚狭駅まで約 35 分

新山口駅から下関方面乗車 厚狭駅まで約 35 分

### 【参考文献】

『山陽町史』昭和 59 年（1984 年）

『山陽町広報』

『下関市史 藩制一市制施行』平成 21 年（2009 年）

『山口県史史料編古代』平成 13 年（2001 年）

『山口県史通史編原始・古代』平成 20 年（2008 年）

『山口県史史料編中世 1』平成 8 年（1996 年）

『山口県史史料編中世 3』平成 16 年（2004 年）

『山口県史資料編中世 4』平成 20 年（2008 年）

『山口県史通史編中世』平成 24 年（2012 年）

『山口県史資料編近代 4』平成 15 年（2003 年）

『歴史の調査報告書山陽道』昭和 58 年（1983 年）

小野田市歴史民俗資料館『わが町の鉄道史 小野田線を歩く』平成 15 年（2003 年）

国土交通省ホームページ <https://www.mlit.go.jp/road/michi-re/1-3.htm> 令和 2 年 3 月 10 日

# 山陽道

陽小野田市 編

歴史散策にでかけましょう！

## 山陽道（西見峠から七日町）

西見峠から下り、厚狭川を渡って広瀬から山野井の七日町へ出ます。ここで埴生道と分かれて右折し、山野井八幡宮方面へ進みます。

（距離 約 5.4 km 徒歩で約 1 時間 30 分）



### ⑪山野井八幡宮

南北朝時代の建武元年（1334）頃に同所に移されたとされています。



### ⑩七日町の分岐点（枝道）

みかげ石の道標が現在も残り、右吉田道、左はぶ道と書かれています。



### ⑦寝太郎荒神社

荒地だった千町ヶ原を美田に変えたとされる寝太郎さんが祭られています。



御国廻御行程記（山口県文書館蔵）  
現在の七日町～山野井付近



### ⑨広瀬から浴まで直線道 2

直線を進むと、行程記絵図にも記載されている石橋（現石丸川）に至ります。



### ⑧洞玄寺

厚狭毛利家の菩提寺で、その代々の墓碑が寺内にあります。今川了俊の日記にも登場しています。

# ウォーク MAP



## ⑤鴨橋

厚狭川に架かる橋で、平成 28 年 3 月に架け替えが完了しました。



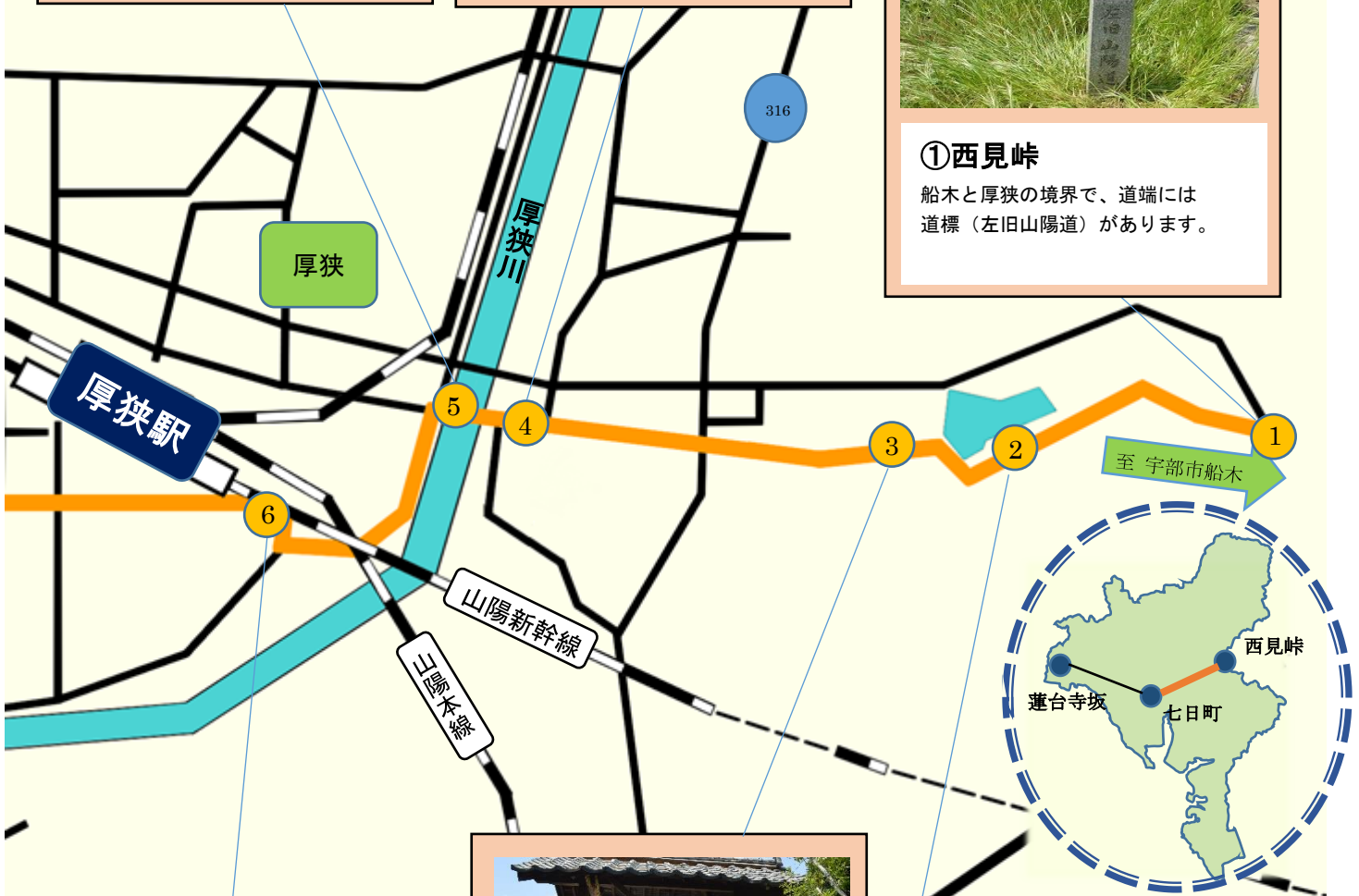
## ④旧厚狭市の街並み

昔から様々な種類の商家が立ち並び多くの人が行き交いました。



## ①西見峠

船木と厚狭の境界で、道端には道標（左旧山陽道）があります。



## ⑥広瀬から浴まで直線道 1

旧山陽道は西の山の麓まで、一直線に続いています。



## ③道祖神

江戸時代に造られた約 1m の道祖神があります。



## ②埴生田の堤

周辺農家の大切な水源です。

## 山陽道（七日町から蓮台寺峠）

山野井から石炭を通過し、福田に入ります。  
福田道標からは山道が続き、蓮台寺峠を越えます。  
峠の手前に福田村と吉田村の村境がありました。  
(距離 約 5.5 km 徒歩で約 1 時間 45 分)



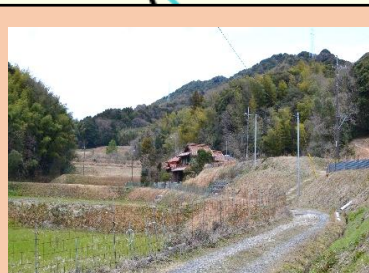
### ㉑蓮台寺

藤原時代の木造十一面観音座像（下関市指定文化財）が収蔵されています。



### ㉒蓮台寺峠

福田から、西北西に向かって、蓮台寺峠まで登り坂が続きます。



### ㉓福田道標から未舗装の道

ここからは段々の田を見ながら、緩やかに曲折し蛇行しながら進みます。



山陽道

福田



御国廻御行程記（山口県文書館蔵）現在の福田付近



### ㉔福田道標

みかげ石道標が現在も残り、右吉田道、左植生道と書かれています。



### ㉕福田八幡宮

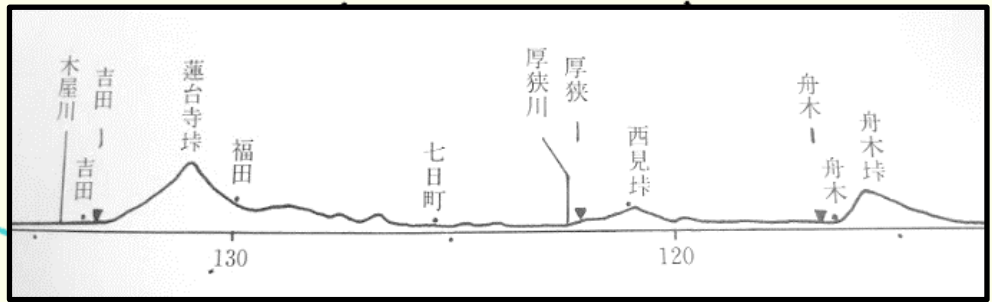
線路を超えて福田八幡宮を右手に直進します。



### ㉖福田八幡宮前踏切

石炭の分岐点からトンネルの上を通り、線路沿いに下ると踏切が見えてきます。

山陽道の縦断面図  
(船木～吉田)  
『歴史の道調査報告書  
山陽道』より抜粋



**⑮石炭 (いしずみ)**  
行程記絵図にも「石スミ」と記されています。



**⑭猿田彦大神**  
山野井から福田に向かう道中に、猿田彦大神と刻まれた道祖神があります。



**⑬お駕籠 (かご) 立場**  
この付近にお駕籠立場があり、殿様が休まれたとされています。



**⑫山野井で2号線と合流**  
山野井八幡宮を右手にみながら進むと2号線に合流し、そこから細い道に入ります。(横断歩道は前方にあります。)